

シベリヤ曠野に咲く花 (其十六)

(表紙)

シベリヤ曠野に咲く花 (其十六)

〔気高郡出身者の美談あり、寫しを御留守に送付□□し済み〕

13 / 1 (柏原) (朱筆)

昭和二十二年十二月五日
中部復員連絡局

(表紙裏)

一 本資料は (昭和二十二年十一月十九日) 舞鶴に上陸せる (白龍丸)
復員者より集めた美談である (永徳丸)
十一月二十日

一 配布先

全復員関係官署

〈第一話〉 大阪府○○○○○○○○○○ ○○○○

話題の主は、元私の部隊の診療科長故△△△小佐殿であります。氏は、新京第二陸軍病院の診療課長として、又関東軍司令部軍医教育部員として、敏腕家として知られ。将来を囑望せられてゐた方ですが、不幸にも吾々將校三千名のものに代つて、昭和二十一年二月七日死亡されました。今無事になつかしの故郷にかへり、我身の幸福を喜ぶ前に、故△△少佐殿の事を偲び、感慨無量敢へて拙文をも願ず、記す次第です。氏は、平素から努力の人熱の人でした。ソ軍に留以來、露語の必要な□□感じて、平壤郊外の三〇七同収容所に生活して居られた時から、階行社版の「露語會話」により、晝間の衛生勤務に専心なため、夜間睡眠時間をさいて、ローソクや凍傷膏を燃して、勉強して居られた様ですが、吾々は十一月二日ウラヂオ郊外ポセット港に上陸して、クラシキの収容所に到着した

時は、もう日常會話にことか、ぬ様になつて居られました。収容所は、天幕で寒氣強く、患者が多発し、衛生関係の業務は専心なため居たのですが、その当時の通訳は、皆衛生上の術語に關しての智識なく、従つて、△△少佐殿一人がソ側の軍医との接渉をされて、朝は六、三〇分頃より夜は十一時—十二時の深更まで、吾々に對する衛生指導ソ側職員との交渉に席の暖まる暇なく活動され乍ら、此処でも皆の寢静まつた夜中、油を燃して露語の學習に懸命になつて居られた様です。十一月二十四日、乗車キツネル迄の汽車旅行中は衛生車にて、輸送間の衛生業務にたづさはつて、相変らずの御精勵振りでした。昭和二十二年十二月二十四日、三週間に余る長途の汽車旅行も終つて、吾々は、「キツネル」と云ふ小駅に着下車しました。△△少佐殿の本當の姿は、此処でいよいよ其の眞價を發揮されたのです。粉雪の散る北歐の黄昏時、何一つ前途に希望も見出さ□□、我々は連日の疲労と、給与の不良による体力の低下、打續く睡眠不足に、慾も得もなく、唯一刻も早く此の苦痛を取り除いて貰ひたい心で一杯でした。その吾々にソ聯は、何と我々に八〇斤の行軍を要求して来たのです。防寒具として完備してゐる人は極く僅かです。重いリュックを背負つた黒い隊列は、一寸ざわめきましたが、又元の沈黙にかへつて行きました。今はもう言葉も出ないのです。然し、ソ側の要求のため止むなく、若くて体力のあるものを主として約千名、各自の荷物を手製の橇にて臂力で引つぱつて先發することになりました。(此処で私は後發になりましたので、以下は聞いたものです) △△少佐殿は長い間の無理のために、列車中から身体を損ねて居られましたが、進んでこの先發梯團附の軍医として行かれることになりました。雪は降る、道は暗く、飢と疲労に悩む一隊は、間もなく「キツネル」の部落を過ぎて曠野に出ました。行けども行けども燈火一つ見えず、音どもは雪を踏む重い足音と、橇のきしる音だけの苦しい行軍です。落伍者は、續々と出て来ますが、誰一人その落伍者に声をかける丈の元氣もありません。唯、夢遊病者の様に両手を物入れに入れて、頭を垂れて前の人の足跡を辿る丈が精一杯です。部隊は黙々と前進します。落伍者は段々と遅れて行き、つひには其の姿も見えなくなつてしまひました。△△少佐殿はこの時、凍傷、凍沍、凍死「いけない助けて行かなくては」この様に考へられたのでせう。本隊から一、二斤も遅れた落伍者を迎へに行つて、叱つたり元氣をつけたりして、傷者の背を押す様にして、本隊に追いつかせられ、本隊の休憩中には隊の先頭迄行つて、一人々々の顔をのぞき込んで、各人の健康を心配され、全く休養もせられずに奮斗され、宿泊地につけば、早速患者の診療をされ、全く我身を忘れて任務を果されました。第二泊目の宿泊地に着いた時、防寒外套を脱いで側に於いて診療しておられたのですが、側のものが、上衣と防寒外套を荷物に梱包にて、橇にのせて先發してしまつたのです。△△少佐殿が氣をつかれた時は、既に部隊の大半は出

発してしまつた後だったので、止むなく常用外套を防寒襦袢の上につけられたまゝ、(上衣なしで)第三日目の行軍に移られたのです。酷寒の下、二十数度吹きつる風に寒氣益々烈しくなつた爲、ついに第三、四日の二日間は一睡もとられず、第一日次に部隊の前方へ行つて、各人の凍傷を一人々々注意したり、後方の落伍者を本隊まで追求させたりして、此の死の行軍といはれた難行軍の間、任務を果されましたが、行軍間の無理が悪くて、遂に十二月三十一日、感冒のためエラブカ到着と同時に入院されましたが、余りにも困難な行軍のため、凍傷患者で入院したもので二百姿十名を越え、又収容所の衛生業務のこと等を考へられて、全快に至らずとて、無理に退院され、直ちに又ソ側との交渉に碎身精進され、或ひは病院附軍属として、患者の看護に余念なく過されたため、終ひに赤痢アターバが発病し、一月十六日再び入院、一月七日終ひに生涯を終へられました。氏は、入院中も相変らず露語の勉強をつづけられ、又病状重くなられても係医官に自分の担当患者の上の色々と御氣をつかはれ、決して御自身が苦しいと云ふことは一言も漏らされず、脳症□□されても露語を口にして居られました。氏こそ本當に我々の生命の親であり、何ものにも代へ難い宝でした。逝去されたからも、ソ側軍医も氏の をしたつて、「ドクトル△△のためなら」と凡ゆる便宜を計つて呉れました。あれから一年八ヶ月後、尚もソ側の一看護婦は、ドクトル△△を忘れず、氏の徳を褒めてゐる程です。

〈第二話〉 埼玉縣○○○○○○○○○○ 中尉 ○○○○

第四軍參謀△大佐を長とする、関東軍將校、及千島樺太郎隊將校約四〇〇は、「ハバロフスク」北方約三〇〇軒森林の丘陵地帯閉ざられたる戸數約二、三〇〇を數へる□□村「ヒラカン」収容所へ移されたるは、粉雪降りしきる日、昭和二十一年十二月七日夕刻であつた。尔来、約四ヶ月□□の不毛の地、雪氷る閉ざられた流刑の地シベリヤ地に、我々の行方定めぬ、暗闇たる抑留生活が始まつた。酷寒零下四〇度、身を切る寒風を衝いて、雪を拂ひ凍を割りつゝ、原木の捜索、運搬作業、膝を没する積雪中の伐木作業、或る時は寒風肌をさす師走の真夜中、貨車積込、却下作業、夜間、私物品強奪と粗悪なる給養を憚みつゝ、も、只々祖国再建のため、奮斗しありたり。然る尔、日を數へる尔從ひ、労働と給養を抗し得ず、患者次第に發生す。綏陽師團經理部主計少尉(幹候9期別府出身)は、平素の勤務極めて熱心、積極的にして一般の模範として奮斗しありたるも、遂尔二十一年一月中旬、感冒のため入室、病室施設、藥品不足のため、病狀次第悪化し、急性肺炎を併發せり。戦友の不眠不食の看護も輸血も空しく、病勢一刻悪化し、遂尔

立つ能はざる重態なんせり。遂尔世を去らんとするや、氏は瘦せ衰へた病体を横たへありしも、靜か耳目を開き、極めて意識明瞭の中尔「私はお先失礼致します。最早駄目です。參謀殿(△大佐) 初め、皆様色々御世話になりました。どうか、どうか祖国再建のため奮斗して下さい……氏尔よろしく(世話になつた戦友ならん)云ひ残す事は、「云ひ残す事は何も有りません。唯々、祖国再建を頼みます。何卒万才の唱和をして下さい。天皇陛下萬歳、天皇陛下萬歳、呼吸次第に急迫し、遂尔最後の萬才を口の中尔含みつゝ、不埒の客となれり。嗚呼、其の雄々しき最後、その熱烈なる祖国を私を滅して公尔生く□□尔範とするものなり。以上極めて乱文尔でありのまゝ、當時の狀況を申し上げます。

〈第三話〉 岡山縣○○○○○○○○○○ 中尉 ○○○○

困窮と曲折に富んだ収容所生活、赤土の如く荒んだ人生の茨道、戦いに敗れ祖国の安泰を念じつゝ、鉄柵の中に味気ない生活を送る抑留所の中にも、亦温い同胞愛と美はしい人間奉仕生活の面があつた。歪曲された環境にともすれば平常の心を失ひ、エゴイズムに走り易い生活面の中にとれば、又頼もしくも微笑ましい「ラーゲル」の一隅に咲いた美談の一齣。
話題の主は、應召前迄、三重縣? 村の村長を難め、朝鮮の威興部隊にあつた△△△少尉。見るからに朴訥に一談々たるその風貌は、如何にも村夫子然たるものがあるが、その抱負は烈々、椽の下の力持ちで結構と云つた、稀に見る人格から、収容所でも人のいやがる便所の汲取人夫で買つて出たのである。この便所汲取には特別の増食があつて、中には増食を目的にする下劣な人間もある様であつたが、同氏はそれらの増食も人に譲つて、たゞ黙々極寒に凍る便所の附近を廻り、或は雨に濡れた汲取口附近を清掃し、全く陰日向なく特掃班長として地味な職場に敢闘した。兎角派手で少しも樂な方面に廻らうと、みにくい人間性で暴路し易いラーゲル生活に於て、氏の様な黙々実行の人を新生日本を求め人であり、きびしい現代の生活面に生きる資格のある人であると云ふべきであろう。

〈第四話〉 徳島縣○○○○○○○○○○ 兵長 ○○○○

外にはシベリヤの猛ふゞき、零下五十五度一足も外へ出ようものなら、凍傷になつてしまふ。室内とても、そのペーチカ、此処のペーチカに五六人の友はかたまりあつて、いつも出る故郷の話に花が咲かして居る。それもその筈、昭和二十

ひまもなく、再び集団長に推される。常に予等若人を教ふるに、眞な日本建設を説かれ、當ラーゲルの誤れる民主運動を指摘せらる。かくの如き大なる思想の変化（強圧的）にもかゝらず、一貫せる集団長として就任し、尚ラーゲル日本人一同よりの表彰も之を固く辞退し、「身は北歐に朽ちるとも」の云の下に誠心誠意、盡力せられたる崇高なる精神は、眞に日本精神の表徴にして、予等マルシヤンスク收容所全員の尊敬する所なり。ここにマルシヤンスク收容所に於ける△△集団長の偉大なる行蹟を記し之を實証す。

〈第六話〉 秋田県○○○○○○○○○○ ○○○

抑留中、私達の心を打った数々の美談善行の中、最初に数千の同胞の集団長として、正に十年一日の如く、只管日本人のため、献身の日常を過しておられる元旅順教育隊長▽▽▽大佐（奈良出身）の御努力を特記したい。收容所行政の困難性は、外ソ側に対する交渉内、日本人間の統制と誠に尋常のものではなかったにも不拘、▽▽大佐の人格、識見、手腕と異常の努力に、よく之を克服し、我々をして常に安んじて自らの業に専念するを得しめた。一度は老年と無理から病床に臥するに到ったが、恢復を見るや、又直ちに層倍の精勵をされ、自ら「日本人のためだ。ソ聯の松の肥となるもなんの悔もない」ともらして居られるのを現に私も聞いた。涙を流して私の出発を喜んで下されたあの姿を、私達は終生忘れることが出来ない。今正に飯郷を前にして、▽▽大佐の御健康を心から祈らざるを得ない。

次に、又同じく老令、白髪△△△大佐の日常がある。收容所には老年の体力貧しい、斯うした上長官にも自活の時には、相当の作業が課せられる。我々青年にとり、誠に見るに忍びない事実ではあったが、如何ともなし難く過ぎてしまった。△△大佐はその強靱な精神力を以て、文字通り自主的な日常生活をなし、作業には自ら進んで連日出場し、尚同じ老令の同僚をカバーしておられた。あの生活態度には全く我々若い者をして心からの反省をなさしめ、兎角すざびがちなラーゲル生活に於て、あやまらざる精神生活の方向を示して下さいました。敬服に耐えないと同時に、満腔の感謝をこの老大佐（五十八才）に対して、捧げるものである。斯様に昔は隣の兵舎へ行くにも自動車を用いた聯隊長殿が心身共に更生し、自分のことはもとより、お互に扶助協力の中に自律的生活を送られつゝある事実を私はお知らせしたかった。時間少なく不備乱筆の点乞御悔容。

〈第七・八話〉 福井県○○○○○○○○○○ ○○○

満軍將校▽▽▽△△△（新京高等軍事學校）大分県出身、氏は、抑留生活の困難なる環境にも拘らず、ソ軍より課せられたる労働に、常に人に先んじて挺身し、病弱者をカバーし、特に夜間臨時使役の場合など、他人の割当の分をも引き受け、常に日本人全体の利益のため、努力して居られました。特に、今次マルシヤンスクより尉官、及市民の主力引揚げたため、残留の老佐官、其他の人の中にあつて、益々努力されて居ることを思ひ、眞に頭の下がる思ひが致します。

少佐 △△△△△（新京憲兵隊司令部）愛媛県出身

氏は、五十二才の高齢にも拘らず、常に明朗に作業を引き受けられ、特に如何なる逆宣傳、恐喝にも屈さず、日本の國体を信じ、新日本建設の進捗を念じつゝ、若い者に迷惑をかけぬとて、課られる勞役をし、其の頑張りで押し通し、今も故國に帰る日の早かれと待つて居られること、思ひます。誠に人格高潔、意志鞏固の眞の日本人の模範であると信じます。これらの人のためにも、一刻も復員の早からんことを念ずるものであります。

〈第九—一話〉 徳島県○○○○○○○○○○ ○○○

▽▽▽△△△ 満洲四一五部隊 岐阜県▽▽▽△△△

右者、抑留後（昭和二十年十二月）希望を失つた暗黒の浮屠生活を飽迄強く生き抜き、明日への建設の爲、先づ自己中隊にて短歌会を作り、續いて劇を自作演出し、好評を博し、其の後も有志をつのりて、劇グループを作り、飽迄慰安を目的とし、漸く民主運動活潑化し、此等グループより反動と迄云はれたるも、飽迄所信を曲げず、積極的な慰安娛樂の爲、敢闘。軽度の胸部疾患に犯されるも、尚之を繼續し、二十一年十月、遂に民主グループより追放を命ぜられる。後一ヶ月休養後、マルシヤンスク生活の不快を感じ、自ら進んでダンボフ市コモソモリスク鉄道工場に出張、当地に於て、尚も労働□暇日本人の慰安の爲努力してゐると聞く。

△△△△△ 満洲第四一五部隊 東京都△△△△△△△△△△△△△△△△

右者、▽▽▽△△△と行動を共にし、自己に音楽の心得ある所から、彼を助け二十一年十月、追放後、二十一年十二月、ピンスタク伐採隊に参加、重労働に服し、尚且、日本人間の荒み勝ちな空気を察し、敢然と之等の人々慰安の爲に努力し、労働

エラブカ第九十七收容所Aに属する一人として、私は主席△△△△氏に対して、感謝を捧ぐるものである。思ふに收容所生活を秩序づけるものは、決して旧將校としての又日本人としての矜持では無く、無秩序な自由と放縦が流れて来た。それは昭和二十一年より二年にかけて、冬の訪れと帰國に対するあきらめにも似た交錯に於て、高まりつゝあつた。こうした場合に於て、これが解□を階級意識の復活に、更に云へば、上からの強權に於て、求められやうとしたのである。だがそこに保たれた秩序は、一部の階級的には、佐官のかつての夢を満足させるに止まり、多くの働く人々の幸福を念願したものではなかつた。若き世代は、二重の鉄條の中に無意義な日を送つて来たのである。かうした流れの中にラーゲルの民主化を叫び、自主的規律の確立を図らうとして、たつたのが△△△氏である。彼は大本営参謀としての地位をすて、人間△△として新しき出発を始めた。もとより茨の難である。毀譽は相半ばした。然し、彼にとつてそれは問ふにたらぬことであり、たゞ如何にして何千の日本人を無易祖国に帰国せしめるかと云ふことが、日夜頭を悩ませたのである。労務、給養、保健、文化それは悉くが対ソ交渉の基礎に立つものであつた。彼の全勢力は、この一点に傾注されたのであるが、捕虜と言ふ立場に於いてなされるこの交渉は難が中の難事である。軟弱外交、或る人はこう評したが「柔のよく剛を制す」と言ふのが彼の信條であり、交渉の成立する迄は幾回となく倦むことを知らず、食ひ下つたのである。彼の睡眠は、極度に制限された。四、五時間も彼は寝たであらうか。すべては全体のために捧げられた。その生活は涙ぐましいと言ふ形容をこえて来た。併し、試練はなほも續いた。時恰も五月シベリヤにも漸く春の訪れが奏せられようとするとき、病魔がラーゲルを死の恐怖へと落し入れたのである。恐れて来た腸チブスの発生を見たのである。五人、十人、隔離病棟は、患者で満たされて行つた。かくて百数十名高熱は續いた。十日目には尊き犠牲者も出た。暗いかげが人々の顔に宿つた。こうしたなかに主席として如何に彼が献身的な努力を續けたことか。私はもう多くを語るをやめよう。唯死亡十七名、パーセンテージに於て、約一〇名と言ふ犠牲性に於て、これが終焉をみたことを附記すれば充分であらう。医療施設としては何も無いラーゲルである。五千人もの集團生活である。防疫史上特筆されてよいことではなかるうか。

私は人間△△を語つた。それは断じて陸軍大佐△△△△ではない。彼は、首席就任に際して、幾つかの方向を揚げた。その第一は若き尊重である。新しき日本の建設は若き世代に委ねられるべきだと言ふのが、彼のかはらぬ信□であつた。その第二は民主的自治の確立である。「人民の」、「人民の爲の」、「人民の主に依る」ラーゲルの建設—かくて自治協力会議が開かれすべての運営は強く与論の反映の上に打たれたのである。その第三は勤勞意欲の昂揚である。民主日本の建設に選

れざらんがため、速く欧露の一角に新生の歩みを續けて来た。日本人の一團のある事を知つて来たゞきたいと思ふ。そしてそこに△△△△の名も記憶して貰ひたい。いま、私は幾年振りかでなつかしい祖国の土を踏むだ。舞鶴の磯の香りは私の心を温くほぐしてゆく。歎びを語るには余りにもきびしき歎びである。六十幾万かの同胞は再びシベリヤの冬を迎へようとする。その中には、大佐△△△がある。健康と自愛を祈ることが、いまの私に許されるすべてである。

《第三話》山形縣○○○○○○○○○○ 中尉 ○○○○

▽▽通訳のこと

彼は、陸軍士官学校第五十八期の紅顔可憐な飛行將校である。満洲に於て、捕へられ、ポセロトに上陸。一九四七年初頭、「エラブカ」Bラーゲルに收容されて以来、彼は通訳として活躍、拾月二十七日、その地出発まで二年の間、首席をたすけて活躍し、ラーゲルの運営に大きな貢献をなしたのである。

私は、七月下旬、ラーダー一八八收容所を移動「エラブカ」に來、本部通訳班でこの▽▽君と生活を共にする様になつた。

私は、彼を單に行動の敏捷な、いはば突貫小僧の様な、まだ青臭い子供と思つてゐた。私の彼に対する第一印象はと聞かれたら、私はそう答へるであらう。たしかにそうとしか答へられないのである。第五十八期と言へば、ラーゲルでは最も若い存在である。▽▽君も他の五八期の少年達と同じ、特に私の眼に映じたのはむしろ当然であらう。然し二日、三日と話を交はし、色々な彼の行動を見、彼について多くを知る様になつた時に私の彼に對□見方は変へねばならない。何故ならば、他の同期の少年達と違つたものを発見したからである。成程、彼の瞳はクリッと丸く大きく、映画に出て来る悪戯小僧の様ではあつたが、その奥底に潜む、冷い理智の光を私は発見したのである。同期の少年達とは違つた大人らしさを見出したのである。私は、時にはあの儘大人になつたら若さを失つてしまふんぢやないかとあやぶんだ事もあつた位である。この冷い理智に裏づけられたら情熱であつたればこそ、ソ聯の大佐、將官等の通訳の際よくその方向をあやまらなかつたのでなからうか。

敗戦の通訳—私もそのことはよく分る—実に辛い。日本語ではどうにでも言へる。然し、之を通訳する時、必ずしもそのまゝ通訳は出来ないことが往々にしてある。適当に考慮して通訳しなければならぬ場合がある。敗戦の通訳ことは全く悲しい存在である。然し、抑留期間中はどうにもならない。強く言ひたいことも遠廻しに言つて、全收容所の日本人の幸福を考へなければならなかつたことは度々あ

このB收容所より連絡ある毎に、A收容所に贈られたものは、美しい慰問の言葉であり、Bの苦しみについては一言半句もふれて居なかつたことは、吾我A四千名の感激に耐へぬ所であつた。

シベリヤ曠野に咲く花（その十八）

（表紙）

シベリヤ曠野に咲く花（その十八）

昭和二十二年十二月廿三日

中部復員連絡局

（表紙裏）

- 一、本資料は 昭和二十二年十二月三日 に舞鶴に上陸せる 朝嵐丸
復員者より集めた美談である 五日 山澄丸
一、配布先
全復員関係官署

〈第一話〉（提供者名欠）

死渡河糧秣運搬行

故 ○○○○
故 △△△△

昭和二十二年十月三日、「ソ」領沿海州地区に於て死歿した故雨君は、共に名古屋市出身、生真面、明朗な性格で兩君の居る所、捕虜の憂愁も吹きとぶ程であつた。その頃、我が中隊はウイツウーミ□グラート間を移動しつゝ、道路作業を續行してゐるが、九月二十八日夜から十月一日迄、小止みなく降り續けた雨の結果、我々の完遂した新道路は處々決潰した。それらの道路を横断する河水は、濁流で増水で轟音を立て、人と車馬の通行を不可能なさしめた。その頃、我々の糧秣は、毎旬程遠い処の本部からの自動車がそれらの河水を渡つて運搬するのである。従つて、既に十月に入つた我々には、少しの糧秣もないが、その自動車の入る見込がなかつた。併し、濁流は何時減水するとも判らない。一度は欠食（絶食）籠城の覚悟を決めた中隊も十月二日、決死隊を組織し、兵員を持つて糧秣運搬を断行することとしたが、人馬を呑まんの急流の濁のため、到底渡河することが出来なかつた。翌三日再度決死隊を組織し、その日こそ是が非

でも渡河断行と決めた。そして出発、決死隊員五〇名故兩君こそ、中隊員のた
め自ら進んで志願して決死隊の二人となったのである。決死隊の一行は寒い霜
柱の立つ三日朝八時、出発して十時より決死渡河を開始した。全裸となった決
死隊員は次々と濁流に飛びこんでゆく。故兩君は一行の最終に濁流中に飛び込
んだ。而してもう少しで彼岸に渡り着かんとした頃、故△△君は足をすべらし、
アツと言う間に濁流に呑まれた。それに續行した故〇〇君は、それを救ふべく
續いて濁流に呑まれた。それらは全く一瞬であった。そして、それから兩君の
姿は、全然見えなくなったのである。兩君の溺死と判断した隊員は、機を移さ
ず死体捜索したが、遂に発見出来なかつた。嗚呼、故兩君遂に永久に去る。尚、
糧秣はその日の夕刻、決死隊の双肩に担われつゝ、中隊に到着、三日間の欠食か
ら救つたのである。想ふにこれは決死隊員、特に故兩君の人柱によって、中隊
員の生命は漸く救助されたと言ふも過言でないであらう。

〈第二話 熊本縣〇〇〇〇〇〇 兵長 〇〇〇〉

現在タンボウ州マルシヤンスク第六回収容所に残留する▽▽▽▽大佐は、保育
中隊にて隣りに寝起きしてゐた精神病患者の△△△△二等兵の世話を親身も及ば
ぬ世話をしてゐた。△△君が大腸炎で入室した際は、自身も附添として入室し、
昨年の三月四月の寒気のきびしい時期にも拘らず、老体をおして△△君が汚した
下着類の洗濯し、用便の世話をし、彼が入院する迄、母親も及ばぬ程の世話を
された。▽▽氏は六十才を越した老体である。この事で一度ソ連側より表彰され
賞金を受けた。△△君は九月下旬帰国した筈である。

〈第三話 (提供者名欠)〉

第一地区第二支部管下に於ける作業優秀者大会に就て
ソ連側の要請に基づき、作業優秀者表彰大会が二回収容所に於て開催された。各収
容所より選ばれた作業優秀者約二五〇名一同に会し、ソ連側代表の感謝祝辞に始
り、各收容所の作業状況報告、作業遂行上の着眼、苦心等に就いて各代表の報
告あり。出席の作業優秀者は、会場に各人の肖像画を掲げて、之を表彰せられた。
朝、晝、夕食共に十品以上ついた御馳走を食し、上等煙草をも支給され、ソ連生
活中、最上の待遇を受け、夜はソ側日本側の楽團演奏、演劇に慰められ、かくて
日頃粒々辛苦の作業優秀者の汗の結晶が、ソ側の認めるところなり。かくも盛大

な表彰の一日を過ごしたのであった。

(参考) 『血涙のシベリヤ闘病記』

(表紙)

配布先 復員官署全般

血涙のシベリヤ闘病記

昭和二十二年十月十八日
舞鶴上陸地支局

(本文)

序言

私は去る十月六日第一大拓丸にて帰國したる一下士官であります。約二ヶ年有餘の捕虜生活を終るに当り小生一生涯を通じて忘るゝ事の出来ぬ只一つの思出として左記の記録を書かせて頂きます。

此れは故國を後に遠くチヨールヂヤ地区にあり若き生命を彼の地の土とした一青年の病床にあつて彼の病氣と闘つた血の苦闘記であります。

戦友の病氣に対しては斯くまで手を盡した事を幾多シベリヤの各地の露となられた故人の御遺族に判つて頂き一日も早くあきらめて頂く様願つて左記を筆に致しました。

何卒未帰還將士の援護に当られる皆様左記文中より幾分なりとも様子を御察し頂けましたら遺族の慰問は然と宜敷く御願申上げます

チヨールヂヤ地区クタイシ收容所

元陸軍々曹 ○○○○記

分隊員の病床に闘ふ

「○○班長！熱いお茶、お茶を下さい」
突然呼び起されて起き上つた。

「何、熱い茶、熱い茶は不可ん。俺が平素お前に話して居る事がまだ判らぬか？」

「ハイ」
と彼は答へた。然し耐へられぬかの如く

「班長殿御願ひです。少しほんの少いで好いから、口だけ濕させて下さい」
自分は水筒の栓を除き

「熱い茶は不可んから、さめて居るのを少しやらう」
と、彼の口に水を與へた。

何故熱い茶を與へては不可んのか。私は此所で彼の病床に附添ふ経緯を書かねばならぬ。

彼は岡山縣出身の男で△△△と云ふ航空兵長であつた。平壤三合里にて自分の分隊に入り興南、ポセツトと常に、自分と行動を共にし口数こそ少いが働く事は人一倍で分隊の行事は一手に引受けて、奮闘すると云ふ実に頼母しき青年で、分隊員からは「△△兵長々々」と親しまれて居つた。

それがソ連領に入りポセツト港よりチヨールヂヤ地区に輸送途中、約中程まで来た頃か、二段装置の上段に寝て居り、振動激しき爲であらう、軀を悪くし次第々々に食事を採らなくなつた。皆は心配して軍医と連絡し、粥食を作つて貰ふ事にした。最初の間は非常に美味いと喜んで食べ一同胸をなで下したが束の間、又食欲がなくなり食事をせず水ばかり飲んで居る様になつた。皆は極力彼に食べさせ様と努めたが駄目であつた。

或る日、汽車が田舎の或る小駅に停つた時、分隊員の一名が小さな西瓜を一つ持ち込んで来た。君分百姓に石鹼と交換してでも貰つたであらう。

「△△兵長これ食はんか。」
上段で寝て居つた彼は飛起きて

「お、！有難う。済まん。」と
早速西瓜は二つに割られ四つに切られ先づその一切れは彼の口にと運ばれた。

「うゝ、美味い。」
感謝の声を擧げた。彼の嬉し想な顔は今でも私の目に映る様であつた。彼の元氣も又、一時取戻した形となつた。

然し果物等は嚴重なるソ軍歩哨の監視下にあつては、容易に手に入るものではなかつた。その一度で最后下車するまで遂々手に入らなかつた。今若しあの時充分果物でもあつたなら△△も元氣で、我々と一緒に帰る事が出来たかも知れぬと思ふたら、居ても立つても居られぬ氣持に満たされるのであつた。

殆ど食はず水ばかりに衰弱し切つた彼を乗せた汽車は、三十日振りに目的地に着いた。車から降りた彼は歩くも余り容易でない軀を約千米離れた收容所にと

運んだ。

翌日、早速診断を受けて、彼は練兵休を取った。相変わらず食事の量少き彼は日毎衰弱を増して行き、分隊長の心痛の糧となった。四、五日班内に起居したる彼は、遂に腰が立たなくなり入室させ附添を附する事になった。

長期に亘る汽車の旅の疲れ、分隊員も一人、二人と倒れて行き、分隊員で附添つてやるのも非常に困難なる実状となった。

一週間を経て愈々仕事が始まった。最早健康なる者は全部仕事に出されるので附添一名を残して貰ふ様交渉して許された。同縣人の一名は喜んでこれに当った。然し彼の容態は日、一日と悪化するばかり、遂に人手を借りても便所に行かれぬ牀となり重症患者病室へと移される事になった。

毎日、作業より帰って彼の病床に見舞ひ、軍医に何かと容態を尋ねて居った自分は容易ならぬ彼の病状に一大決意をせざるを得なくなつた。

「よし、俺が必ず彼の病氣を治して見せる。俺の、俺の誠の力で。」

心の中で斯く叫び、斯く誓つた。そして分隊員の者と交替し彼の病床に彼の病氣と闘う決心をした。

分隊員は、彼と縣を同くする彼の戦友は、

「分隊長がやらなくとも自分達の手で、分隊長は牀を悪くして居るのに人の看病等」

と暖かき言葉を以て自分の交替をこぼんだ。

然し、自分は、

「彼は俺の部下だ。云はゞ弟も同じ事だ。俺はどうしてもあれを治して元の牀にしてやらねばならぬ。俺は俺の持つてゐる總ての力を以て彼の病氣を治す。きつと治して見せる」と固く固く心に誓つて彼の病床に附添ふ事になった。

先づ軍医の許に行き彼の症状につき詳かに聴き注意を受けた。彼の病氣は胃の中が非常に弱り爛れて居つて極端なる消化不良を起して居り、腸は慢性腸炎を併発し栄養失調がこれより来てゐるとの事。又、胸部疾患も若干あつて熱はそれより出る。先づ注意を要するは刺激物嚴禁、特に熱い茶、水等を出来る限り與へぬ様との事だ。然るに彼は悪いものはかり欲しがるのであつた。自分は思った。眞に彼の事を思ふなら心を鬼にして掛らなければならぬと。

以上が自分の彼の病床に附添ふ経緯であります。そして常に枕辺にある自分は、彼に色々と話して聴かせ激励し、若し俺の云ふ事を聴かぬ時は俺はお前の看病を辞めて終ふと迫言ふて医者と言ふ事を聴かせて居つた。

一日、二日、三日、一週間と日は経つて行つた。然し彼の病氣は決して落観を許すべきものでなかつた。

その内に愈々苦闘の覺悟を固めねばならぬ日が来た。それは病人の附添は認めぬと言ふ連側の達しであつた。即ち衛生部員以外は附添が出来ぬ、作業を休んでの附添が出来なくなつたのだ。衛生部員に任ず事は充分手の盡す事の出来る時は結構だ。然し数十人の病人を三、四名の衛生部員で何で充分なる事が出来るか。暫し考にふけた。自分の牀も本当ではないのだ。まして作業に出て帰り病人の附添、そんな事が自分出来るか。そんな事をしたらそれこそ自分の牀まで参らせて終ふ。自分はどうすべきか途方にくれ暫し茫然とせざるを得なかつた。然し思を今一度彼の病床に附添ふ決意に戻した自分は如何に誓つたか、

「自分はどうしても彼の病氣を治してやるのだ。彼を元氣の姿に戻すのだ！そ

うだ！ヨシ」

と再び決意を新にする自分であつた。

分隊員は、

「班長、そんな事をしたら班長の牀が駄目になる」

と、幾度か止められた。

然しお互に弱つて居る牀の持主故、善後の處置は出来ず又

「どうし様か、どうし様か」

と溜息ばかりを漏らすのみであつた。

「なあに大丈夫だ俺は彼奴の爲、彼奴を生かす爲張切つて居る。決して途中で斃れる様な事はないぞ」

と心の程を皆に示した。

相変わらず自分の藁布団は彼のベットと並べて敷かれた、晝は作業に出て帰れば彼の病室への生活が始まつた。朝起床は五時、食事が済み作業整列は七時、作業開始八時夕方の終ひが五時であつた。

最初の一日二日は余り苦痛を感じなかつた。然し四日、五日、一週間と續く内に漸く疲労の徴は表れて来たと共に彼の容態も要注意の域を脱し悪化の一途を辿る様になつた。

作業に疲れた牀を横たへうつらうつらすれば小便、大便と一夜に数度起され、その上一夜に二度水筒を熱くし彼の腹を暖めてやらねばならなかつた。

こんな事もあつた。或る夜

「〇〇班長々々」

「二、三回呼んだらしかつたが晝の疲れが手傳つてか仲々目が覺めなかつた。

「〇〇班長々々」

と余り自由な牀でないのを動かして自分の手を振り、自分を起した。

「うゝん、何か」

と起上つた。

「便所」

「ヨシ」

と立上って便器に使う樽を取りに行った。

「さあ」

と起してやらうと思つたら

「もう出た。」

「何出た！我慢出来なかつたのか。」

「いくら呼んでも起きてくれぬもの。」

「そうかそれは済まなかつたな、どうれ」

と毛布を取り袴を下してやらうとして紐を解いた。

(註) 此の病室は新築間もなく未だ電燈線の設備がなかつた爲、何もかも手

さぐりでやらねばならず、従つて医官の行ふ夜間のカンフル注射も皆手

さぐりであつた。此の様な環境下大小便の處置は心痛の種であつた。

彼の「出た」の一言に注意して袴を下し袴下の紐を解かんと手をやればグニヤ

ンと生温きもの「アッ！」思はず手を引いた。どの様になつて居るか見当が附か

なかつた。

「そのまゝにして居れ」

の一言を残し飯盒の掛盒を取つて外に出た。急いで手を洗ひ、足を炊事に運んだ。

時刻は一二時を廻つて居るか。炊事には朝食の準備の庖丁の首がコッコツとなつ

て居た。

「遅くに御免下さい。皆さん勤務御苦労さんです。班長さん居られますか」

と中に入つて行つた。丁度、班長は居らず夜勤の下士官が、

「何か用事ですか」

と答へてくれた。

「あの誠に恐縮ですが、自分は重症病棟に附添に来て居る者ですが、患者が用

便の爲に被服をよごして居るらしいが燈火がなくて困つて居ります。油があつた

ら少し頂けませんか」

と用意したる掛盒を出した。

「あ、それは御苦労さんですね。……余り澤山はありませんが」

と快く配給のラードの若干を掛盒に入れてくれた。

礼を言ふて外に出たが帰つても燐寸がない。仕方なし炊事の焚口に廻つて火を附

けて貰つて持帰つた。

燈火で見れば何の事上衣、袴、袴下、襦袢、褌、藁布団と大便で一杯、どこか

ら手を附け様かと暫し迷ふたが手早くその處置をして、全部を脱がせ洗濯をした

他のものの上から下まで交換をして、藁布団の上には南京袋を敷いて先づ寝かせ

た。さて、この洗濯物の處置だ。明日にしようかと膝の疲れを思へば考へざるを得なかつた。然し病人だ何時、又同じ事があるか判らぬ。一時も早く乾かして置かねばとそれを持って再び外に出た。外は一面の暗やみ、黒雲は拡つてしとしとと小雨が降り出して居る。その中を収容所内を流れてある小川に來た。一枚一枚洗つてゆく。暗がりで行ふ手さぐり洗濯は手間が掛つた。小一時間を経て漸く終りさてどうして乾かしてやらうかと名案を練つた。

「うんよし」

と自分はそれを持つて炊事の焚口に行つた。夜勤の炊事班員に理由を話し乾させて貰うことにした。表裏一枚々々をこがさぬ様に乾し上げ、戻つた時は三時半を廻つて居つた。後一時間もすれば、又起きて作業かと思ひつゝ洗濯物を片付けて床に入つた。

然しこの様な看護も効なく彼の病氣は一日と悪化するばかり、遂に便に血が混じり黒い便を出す様になつた。自分が地方に居る時に聞いた

「ガニ便が出る様になればもう駄目だ」

と、彼はもうそれまで行つて居るのだ。

医官も便を見「克く注意してくれ」と言ふて、診断の度に自分に色々注意を與へた。

「〇〇班長今頃内地は葡萄が出て居るね。葡萄が食べ度いなあ」

「金さへあれば此所でも何程でも食べさせてやるが」

と答へたが自分の胸は張りさける様であつた。若し捕れの身でなかつたならば食べ度い丈食べさせてやる事も出来るのにと。班に帰つた自分は此の事を分隊員に話し、どんなに少しでも好いから手に入つたら持つて行つてやつてくれと頼んだ。粥が上つても半分も食べず野菜の入つたスープを少し吸ひ僅かに二〇瓦の配給の砂糖を茶に入れて飲まして日を送る彼が可哀想でならなかつた。時々小隊長が心配してか禁じられて居る配給の石鹼とリンゴ等交換をして持つて來て呉れたのを一日に二、三回、一個宛すり卸し布切れで絞つては飲まして元氣を回復させて居つた。又炊事に入る人參は軍医の許可を経て炊事より貰ひやり卸して絞汁を與へた。彼にとつてはこれを與へられる時が最も樂しき時と感ぜられた。

或る日彼の友達某が遠く自動車で使役に行きグルジャ人よりザクロを買つて來て一つくれた。

「おい△△、これ食ふか」

と尋ねた。

「うん」

と、自分は實を取りその數粒を彼の口に與へた。

「どうか美味いか」

「美味い」

彼は喜びを彼の顔一面に出して答へた。その日は何と一日非常に元気が出て食事等も平素より澤山食べた。不思議に感じて軍医に尋ねれば

「まあ丁度葡萄糖の注射をした様なものだ」と話され成程と思つた。

四、五日を経た或る日、分隊長で△△と一番仲好しだった戦友が何所からどうして手に入れたか葡萄の一房をさげて来た。

「班長これを△△兵長に食べさせてやって下さい」

「おう有難う。然し、どうして手に入れたか？」

「何心配は要らんですよ。決して盗んでは来ませんから。」

「まあ兎に角有難う」

と足も地につかぬばかりに彼の病床に馳附けた。

「△△、々々」

と眠つて居る彼を起した。

「葡萄だ！葡萄だ！」

静かに目を開いた彼はニコリと笑つた。一つ、二つともぎ取つた粒を彼の口に入れてやつた。口の中で首のする程喜んで食べた。一房の葡萄は三面に分けて彼を喜ばす事が出来た。

然しこうした自分の努力も誠も神に通じなかつた。遂に彼の最後の日は来た。自分は平素の如く彼の病状を氣遣ひつゝ、眠りに就いた。その夜は余り夜中に起されず三、四回で済み、中隊から怒鳴る「飯揚げ」の声に目を覺した。あゝもう飯揚げか、又作業だと思ひ乍ら床を片付けて中隊に帰らうとした。今回すやすやと眠つて居ると思つた彼は目を覺して居り、

「班長何所へ行く」

と声を出した。

「何言ふてるか。俺は今から中隊に帰り飯を食ふて作業に行くんだよ」

「ふうん作業に行く、俺は今から内地へ行くよ」

「何々々……な内地へ、内地へ」

「おいしつかりしてくれ。何言ふてくれるのだ」

と心の中で呟いた。最早、駄目ではなからうかの不安が頭の中に閃いた。

自分は何も答へず病室を出た。中隊に帰つた自分は、小隊長に「△△はもう駄目かも知れません。」と力なく話した。

その朝の食事は何を食べたか判らぬ程自己を失つて居つた。整列の鐘が鳴つた。仕度をした自分は足を医務室に走らせた。静かに戸を開き敷布を被つて居る彼の顔をのぞいて見た。衰弱し切つた彼の顔、然し安らかな眠りに入つて居た。そし

て自分は毛布の中に手を入れ彼の脈を見た。荒れて居るに加へて強さを失つて居つた様に感じて病室を出たが、内地へ行くの一言は胸さわがさせずには居られなかつた。收容所の門を出た自分は、隊列に交つて只フラーフラーと魂を抜かれた人間の如く歩いて居つた。作業場に着いた。皆シヨベル十字鉞を取競ふた。自分は最後に残りたるものを員数で握り現場に向つた。皆の者は休んで先づ一服と美味そうに煙草を吸ふて居つた。土手に腰を降した自分は、煙草を吸ふ事も忘れ只ぼんやりとして居つた。作業始が掛り皆手に十字鉞を振り上げ作業を始めたが、然し自分はそれを知らなかつた。突然後ろで「ボチム ニ ラポーターだ(何故作業せぬのか)」と現場監督の怒鳴る声に、我に帰つた自分はシヨベルを取つて立上つた。その日の一日の長さは全くじれつたい程氣をいらつかせた。

漸くにして作業終りとなつた。自分は雑糞水筒を握つて最先頭に並んだ。何時もと少しも變つて居らぬのに、その日に限つて皆の整列が遅いかの如くもどかしくてならなかつた。

「△△！元氣を取戻してくれよ」心の中では只その叫び。收容所の門を入つた。

「御苦勞さん、解散」の聲に足は一路医務室へと。心を靜めて室に入る。相変らず敷布を被つて居る。端を取つて中をのぞき込む。

「おうーこれがこの世の人か」直ぐ脈を見た。」手はかすかに暖かい。脈も僅かに打つて居るかの如く。

急いで医官室に飛込んだ。

「軍医殿△△が」

「……今帰つたのか、御苦勞さん。君も作業に出たり、病人の附添をしたり非常に努力して貰つたが愈々駄目だ。今朝からカンフル七本も打つたが効果がない。呼吸も殆んどして居らず只かすかに心臓が働いて居るのでそのまゝになつて居る」

あゝ、その一言に一ヶ月有余に互る努力も水泡に帰したかと、どつかとばかり診断ベッドに尻を落して暫し茫然とした。

「軍医殿何とかありませんか。もつと手を盡してやって下さい。それではそれでは余り〇〇が可哀想です。」

と言ひつゝ、男泣きに泣いた。

然し如何ともする手は最早なかつた。自分は再び歩を彼の病室に運ぶべくフラーフラーと医官室を出た。枕許に腰掛けた自分は彼の手を握り彼の脈を握つた。雑糞を下す事も巻脚絆を取る事も忘れて又彼の手を握り續けた。

その夜二時十分遂に彼は黄泉の客となつた。話によれば彼には母なく兄にも死別し只一人の姉と父の三人暮しと聴いて居つた。

「△△！何故死んでくれた。俺の氣持も知らないで」

心に叫びつゝ、只出るものは涙々……であった。

「お前は内地へ帰ると言ふたな。帰ってくれば御母さん、御兄さんの御膝元へ
そして安らかに永遠の眠りに就いてくれ。たとへお前の躰は遠きジョールヂヤの
土とならんとも、お前の魂は必ず懐かしき故郷の山に戻る事を信じ又斯くあれか
しと祈つて居るぞ」

翌日、彼の遺骸は暖かき戦友の手に依り日本式の棺に収められ、収容所西南の
墓地に葬られた。大隊にて準備されたる供物を終り「故陸軍伍長△△△之墓」
と書かれたる眞新しき墓標に合掌し彼の冥福を祈つたが、次々と目にあふるゝ涙
を如何ともする事が出来なかつた。

終り